

むけてしまった。ナカは手当てをやってやったが、子どもの泣き声はやまなかった。

この時、官軍が野上に来るといいうわさが伝わった。人々は荷物をまとめて後の山へかかれることになった。ナカは夫の精助に言った。

「オラナー、みんなに迷惑かけるからここにいる。官軍だって鬼でもあんめえ。」

「バカ、若い女がいてみろ。あの鬼たち何しっかわかんねえ。」

「だめだめ。オラーとこにゃ、アミダさまもござっしゃる。」

ナカは動かなかつた。一睡もしないで子どもの手当てをした。

翌二十九日朝、大和久の方に鉄砲の音が聞こえた。ナカは一心に念仏をとなえた。アミダさまが守ってくださるにちがいない。そのうち兵士たちは後の道をドタドタと足音をたてながら通った。二・三人が井戸で水を飲んだ。一人が声をかけた。

「オイ女、なぜ逃げぬ。」

「子どもが大やけどして泣くんぞ。」

「お前偉いナ。子どもを看るに残ったのか。」

「ハイ。」

仏壇をみてその兵士は言った。